

災害支援ニュース Vol.9

※この情報は、関係機関、団体及び三田市ボラセン登録のボランティアグループ災福サロン、さんだつながりバンク（災害版）登録者に配信しています

発行

三田市社会福祉協議会
三田市ボランティア活動センター
TEL (079) 564-0410
FAX (079) 559-5945
Email vcen@sanda-shakyo.or.jp
2011年5月18日(水) 15:00 現在

▶ ボランティアバス1号の活動◀

多くの皆さんにお申込みをいただきました「第1号さんだボランティアバス」は、5月6日18時にボランティア活動者40名を乗せ宮城県石巻市へ向けて出発し、2日間の活動を終えて、5月9日早朝に帰着しました。

今回参加者の多くが、災害ボランティア活動は初めてということもあり、みな緊張の面持ちでバスに乗り込みました。バスは12時間かけて、石巻市災害ボランティアセンターに向かいました。その途中はあまり被害を目にすることがなく「そんなにひどくないのかな?」と思われた方が多いようでした。しかしバスが市街地に入り、少しずつ津波の爪痕があらわれ、道路わきには土嚢袋やガレキの山。沿岸に向かうほど信号機が機能せず、家屋の被害もひどくなり、新聞や、



テレビを通してではなく、目の前に広がる真実の光景に言葉を失っていました。

1日目は家の中の泥かきはされていたものの、側溝がつまって逆流し、水を使えないなどの声があり、側溝の泥かきを実施。普段の溝掃除とは違い、津波による大量の泥はかなりの重さと独特の臭いでしたが、少しでもきれいにとの思いで活動を行いました。

2日目は学校で避難所生活をされている方が多い渡波小（現在も満潮時に冠水する町）が、10キロ程度離れた貞山小と山下中へと移転して次の日（5/9(月)）から学校再開を行うことになっていましたが、その準備ができておらず、机やピアノ、そして教材が運べていないから手伝ってほしいとの依頼があり、引っ越し作業を行いました。

机やイスを抱えて階段を何往復もすると、腕や足がつかなく、攣りそうになりながらも、みんなで声を掛け合い、助け合いながら全てを運び、そして明日子どもたちの笑顔が少しでも増えて欲しいと、廊下や階段な

ど隅々まで掃除をしました。最後に校長先生から「遠い三田から来ていただいたことを生徒に伝えます。何もできませんが、このお礼は、子どもたちのりっぱな成長でお応えします。」とっていただき、微力ながらも力になれたことがうれしく感じました。

今回の支援は移動時間が長く、たった2日間の活動です。できることも限られています。しかし、遠く三田からも支援の手や声を被災地に届けることは、復興作業の一助だけでなく、復興への勇気や希望となる心の応援につながるのだと思います。そして、この活動をとおして、参加者には自分たちの心に届くものがあつたようです。参加者の声を少しご紹介します・・・



☆悲惨な状況で心が折れそうな中でも、立ち上がろうとする人は決して弱さを見せず、そんな姿に自分が勇気づけられました。(20代 男性)

☆自分自身の五感で感じたことを振り返り、継続的な支援をしなければと思いました。(20代 女性)

☆普段の生活の中で”生きていく”について深く考えていなかった。初めて「生きる」ということを実感しました。(30代 女性)

被災地へ行くことは、自分の目からだけでなく心で感じる多くの真実があります。そして、それらの真実を家族や友人知人に伝え、「何ができるか」を共に考えることは、被災地の大きな支援へと繋がります。自分の手で被災地に直接する支援。遠く三田からできる支援。支援を支える支援など、沢山の支援の形があります。その一つである、「災害ボランティア支援金」は、三田市社会福祉協議会が、三田発の災害ボランティア活動の支援に充てる募金です。

このたびバスにご参加、ご協力いただきましたみなさまにお礼を申しあげるとともに、今後もみなさまの想いを形にできるように取り組んでまいりますので、ますますのご協力をよろしくお願いいたします。